

暮秋雜吟（土屋竹雨）

六十年 華指 一彈

顏朱 銷え 尽きて 髮凋 残す

文鬢 久しく 宰して 微績 無く

芸府 新たに 除せらるるも 是れ 散官

鴻雁 長天 秋信 遠く

桑榆 故国 夕陽 寒し

余生 那ぞ 願わん 軒裳の 貴きを

槍江に 泛んで 釣竿を 把らんと 欲す

六十年華指一彈 顏朱銷盡髮凋残  
文鬢久宰無微績 藝府新除是散官  
鴻雁長天秋信遠 桑榆故國夕陽寒  
餘生那願軒裳貴 欲泛滄江把釣竿

解説 日本芸術院会員に推薦された後の作。

語釈 ※六十〇日本芸術院会員に選ばれた昭和二十四年以後、六十二、三の頃をさす。※年華〇年月。※顏朱〇紅顏の美少年をいう。竹雨の若き頃をいつた。※銷尽〇おとろえつきる。〇。※髮凋残〇髪の毛もぬけてわずかに残っている。※文鬢〇まなびや。大東文化学院をさす。※久宰〇大東文化学院に奉職して以来六十に至るまでをいう。〇。〇無微績〇わずかな業績しかない。〇。〇芸府新除〇日本芸術院会員に列せられたことをいう。〇。〇是散官〇名だけの官職。〇。〇芸術院会員という職は名誉職に過ぎぬの意。〇。〇鴻雁〇大きい雁と雁。鴻雁にかこつけて故郷の地を言った。〇。〇長天〇広い空。〇。〇秋信遠〇秋に雁が持つてくる便り。故郷からの便りをいう。〇。〇桑榆〇くわとこれの木。転じて日暮れをいう。〇。〇ここでは夕暮れをいう。〇。〇故国〇竹雨の故郷をいう。〇。〇余生〇残りのいのち。〇。〇那願〇何を願おう、何も願わぬという意味の反語。〇。〇軒裳貴〇富貴な身分をいう。〇。〇滄江〇広く深い川。

通釈 六十年の歳月は指一彈のようにはやく過ぎ去り、かつての紅顏も消え失せ、髪をわずかに残すだけである。学び舎等を主宰してきたが、あまり成果もあがらず、新たに芸術院会員に選ばれたが、これも名誉職に過ぎぬ閑職である。秋になると、大空をかけて故郷の便りを伝えてくれる雁も待ち遠しく、夕暮れの故郷の太陽は今頃は寒々しいことだろう。残り少ない人生、何をあくせくして富貴を求める必要があるか、いっそのこと大河に舟を浮かべて釣糸をたらしたいものである。